

— 座 談 会 —
「読書と図書館の活用」を語る

佐々木 憲一* 井田 正道† 海野 素央§
浮塚 利夫¶ 梅田 順一|| 木谷 光宏 (司会)**

* ささき・けんいち / 文学部助教授

† いた・まさみち / 政治経済学部助教授

§ うんの・もとお / 政治経済学部助教授

¶ うきづか・としお / 図書館事務部総合サービス課長

|| うめだ・じゅんいち / 図書館事務部総合サービス課

** きや・みつひろ / 図書館副館長 / 政治経済学部教授

木谷 皆さん方には、年の暮れのお忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。今日は「図書館活用法」を担当していただき、おりますスタッフの皆さんを中心にお集まり頂きました。本日は読書と図書館活用というテーマで皆さん方にお話をさせていただきたいと思えます。まず最初にご出席の皆さま自己紹介を時計回りの順にお願いします。それでは井田先生からお願いします。

井田 政治経済学部で井田と申します。計量政治学という科目を担当させていただきます。よろしくお願いします。

浮塚 総合サービス課で総合サービス課長をしております浮塚と申します。よろしくお願いします。

梅田 総合サービス課でマルチメディアエリアを担当しております梅田と申します。よろしくお願いします。

佐々木 文学部で考古学を担当しております佐々木でございます。よろしくお願いします。

海野 政治経済学部で異文化ビジネス論と異文化間コミュニケーション論を担当しております海野と申します。よろしくお願い致します。

木谷 本日、司会を勤めさせていただきます図書館副館長の木谷と申します。政治経済学部で産業心理学という科目を担当しております。

学生時代の図書館利用の体験談

木谷 早速でございますけれども、本日のテーマ「読書と図書館活用」ということでお話をさせていただくわけですが、本日もご出席の皆様方に、自分の学生時代を振り返って、学生時代に大学図書館をどのように利

用したのかということでお話しいただければと思います。それでは井田先生からよろしくお願いします。

井田 実は私は、大学の1・2年の間というのは本を全く読みませんで、図書館といわず、およそ本というのは読まなかったんです。大学2年の秋にゼミ試というのがありまして、ゼミ試で「最近感銘を受けた本」って聞かれまして、正直に「私、大学に入って本を読んでません」と言ったわけです。それが1つのきっかけになりまして、このまま4年間過ごすんじゃまずいなど。私は運動部に

おりましたのでスポーツばかりやっていました。このまま4年間いるんでは、体力はついてもだんだん脳が退化していくと思って、手当たり次第に小説であれ何であれ読むようになって、そのうちに専門書とかも読むようになったわけです。

大学の図書館には、最初は試験期にしか行ってなかったんです。要するに、試験のときに勉強する場所の確保で行っていただけなんです。今みたいに開架というのはあまりなかった時代ですが、次第に興味あるものの文献リストを調べていくうちに、何となく図書館の雰囲気というのが好きになってまいりまして、そして何か読みたい本がないかなということで、図書館の文献リストを調べてみたり、今みたいにコンピュータじゃなかったですけども、そうやって図書館を利用し始めました。

そして、進路において大学院へ進学するということになりましたら、やはりその関連の文献ですね。こういうものを図書館へ行って調べるといような形で図書館を利用していたということになります。学部時代ということに限定しますと、だいたいそういう使い方だったように思います。

木谷 井田先生ありがとうございました。海野先生は米国の大学で博士号の学位を取得されておりますので、日本の場合と、それからアメリカの場合と両方を比較してお願いします。

海野 アメリカに留学していたときですが、図書館にゲストスピーカーが来ました。図書館でゲストスピーカーの話を聴くのが楽しかったです。木谷先生は、私が学生時代に「一期一会」という言葉を教えてくださいましたが、アメリカの大学の図書館で一生に一度限りの出会いがあったんです。ゲストスピーカーのワレンチン・ベレズホフさんという方でした。テーマは「21 世紀のリーダーシップ」で、ロシアなまりの英語を話していました。20 世紀は戦争の世紀だったから、21 世紀はリーダーは平和をもたらさなければならないと主張していましたが、現実は違いますよね (笑)。

実はこの方、よく聞いていましたらスターリンの通訳だったんです。講演が終わってから私に、『At Stalin's Side.』という本を書いたが、日本語に訳されているぞと言うんです。帰国後、すぐに中央図書館へ行って調べてみたら、『私は、スターリンの通訳だった』という題名で訳されていました。写真を見ると、ヒトラーとスターリンの通訳をやっているんです。本当に驚きました。

こういう人とお会いできたのも、図書館のスタッフがゲストスピーカーを呼んでくださったからです。私は、スターリンやヒトラーのファンではないです。ですけど、思い出の一つになっています。

偶然なんですが、NHK がベレズホフさんにインタビューをした番組を実家で見ました。ご存じのように、第一次世界大戦のときゾルゲというスパイが日本にいましたね。日本は南下することを決めたという情報をゾルゲがスターリンに打ったそうです。それをスターリンが読んだときに、笑みを浮かべたのをベレズホフさんははっきり覚えていると語っていました。

余談ですが、ゾルゲはアゼルバイジャン共和国のパクーで生まれています。1998 年の夏に、JICA の仕事でアゼルバイジャン共和国へ行って来ました。

次の話も図書館での出会いについてです。アメリカに留学すると勉強しなければならないので、図書館にある自習室を活用しました。当時、デンマーク人、イタリア人、インド人の友だちがいました。彼らは、気が狂ったように勉強するんですよ。3時とか4時まで図書館にある実習室で勉強して、朝7時に起きて、8時にはカフェテリアに来て朝食をとっているんです。私も負けないように彼らと同じペースでやりましたけど。

すごく印象に残っていることは、彼らが自習室で座る席が決まっていたことです。私も座る席が決まっていました。彼らは、私の席には決して座らなかったのです。尊重してくれているんですよ。モトオは必ず勉強に来るって思っていた訳です。私も彼らの席には座らなかったですよ。彼らは、必ず授業が終わってから自習室に来ると思っていましたからね。ニューヨークへ行くと、インターナショナルハウスの図書館にある自習室に行くと、自分が勉強していた机と椅子を見ます。すごく思い出があるんです。図書館が人生を変えてくれましたから。

木谷 海野先生ありがとうございました。佐々木先生も米国の大学にて博士号を取得されておりますが、米国の図書館の特徴はいかがでしたか。

佐々木 私の場合、大学はミシガン大学、大学院はハーバード大学でした。2つの面で僕にとって図書館は、留学時代なくてはならない存在でした。

1つは、いま海野先生がおっしゃった自習室の存在です。例えばミシガンでは午前2時まで、試験期間中は午前5時までというように、アメリカの大学図書館は夜遅くまで開いています。図書館の自習室で勉強していると、居眠りをしても目を覚ますので、自らに鞭打つために1日8時間は自習室におりました。

2点目。アメリカの大学では、レポート課題が難しくて、教科書に頼っているだけではとても書けませんから、図書館で調べものをしないとイケ

ないんですね。

アメリカ人は基本的に本を買いませんから、図書館に本が揃っているという社会的前提があります。ですから、ミシガンにしてもハーバードにしても、図書館の蔵書量が大変多いものですから非常に便利なんです。

特に僕は英語を読むのが苦手でしたから、レポート課題が自由のときは、だいたい日本のテーマでレポートを書くんです。そうすると日本語の本で調べものができるからです。ミシガンでもハーバードでも、日本語の本が、少なくとも商業出版物は全部網羅的に所蔵しているので、非常に恩恵を被りました。

木谷 佐々木先生ありがとうございました。それでは次に、現在、総合サービス課で業務を担当されています浮塚課長はいかがですか。

浮塚 私は学生時代は文学部で日本史を専攻していたという関係がありますので、卒業論文を書かなければならないということで、大学図書館や公共図書館を利用しました。

そのときに非常に印象に残っていることが1つあります。当時の目録とは分類目録と著者名目録があり、著者で探してなかったので図書館の職員に調べてもらったら、明治大学にはないということで、国会図書館へ行きました。その後、明治大学に就職することになりまして、図書館に勤務することになったわけですが、ないと言っていた本が、実は図書館の書庫にありました。その時の経験から、「ない」と言うのではなく、自分が何を調べた結果なかったのか、きちんと伝えないと利用者は図書館員がないと言えば本当だと思いますので、言葉には注意を払う必要があることを痛感しました。そのときのことが印象に残っています。

木谷 浮塚さんありがとうございました。同じく総合サービス課の梅田さん、お願いします。

梅田 私は今、学生対応をしている側ですが、8年前は利用者として図書館を使っていた立場で、今の学生に近い状態だったかなと思います。

自分は本を読むのが好きでしたので図書館をよく利用しましたが、ただ自習や試験勉強のために使っていたというのが主で、正直レファレンスとか書庫という存在を知らなかった利用者です。

職員になって、図書館に配属されて初めて書庫の存在がわかって、レファレンスサービスは何かということを知りましたので、とてもカルチャーショックを覚え、何でもったいないことをしたんだろうと感じたのが事実です。今は、学生たちに、こんなに図書館はいいものなんだよというのを少しでも伝えられたらと思って仕事をしています。

木谷 梅田さんありがとうございました。図書館は、情報集積の「知の宝庫」ですから、それを目の前にして何もしないというのも宝の持ちぐされですね。

梅田 もったいなかったと本当に思います。

木谷 確かにそういう学生が多いのかもしれませんね。レポート提出のための資料や文献探しとか、試験の前にちょっと図書館を訪れて、試験勉強のためにというのが。教員の責任もありますけれどもね。

学生を本と図書館に向かわせるには

木谷 いま体験談としてご自分の学生時代の図書館の利用の仕方についてお話をしてもらったわけですがけれども、最近、学生の活字離れ、読書離れが増えて、だんだん本を読まなくなってきたということが言われているわけですがけれども、どのようにしたら学生に本を読んでもらえるか。それと

同時に図書館に足を向けてもらえるか。そういう魅力づくりみたいなものを含めて、学生を本と図書館に向かわせるにはどうしたらよいのか。彼らを何とかして図書館に誘い込む方法を考えなければならない。それについて皆さん方に、お伺いしたいと思うのです。

学生に1冊でも多く本を読んでもらうために、先生方は授業やゼミ等で何か工夫をされていることがございますか。

佐々木 私は次の3つの方法を実践しております。まず、3年生、4年生向けのクラスを対象に、図書館で調べものを沢山しなければ書けないようなレポート課題を出すことです。例えば、特定のテーマの研究史や、先学の論文を批判的に検討せよ、など、数多くの文献に当たらないと、まともなレポートは書けません。こうすることにより、学生諸君は図書館を利用せざるを得なくなります。2番目は、1,2年生対象の「考古学概説」で、授業のテーマに関連する高額の本を教室に持ち込んで、学生に回覧するのです。その際、この本は君たちの授業料で購入し、中央図書館で所蔵している、と必ず付け加えるのです。これで若い諸君は、図書館の役割を多少くらい理解してくれるのではないかと考えています。3番目は、考古学専攻2年生の必修授業を駿河台の考古学実習室で行っているため、4月下旬の授業時間に、受講生を中央図書館のツアーに連れて行くのです。例えば、地下の奥の自動集密書架には中国・韓国の遺跡調査報告書が数多く所蔵されていますし、明治大学が誇る都道府県史、市町村史のコレクションには考古資料編がだいたい入っていますから、2年生諸君は、中央図書館が考古学専攻生にとって如何に大きな存在か認識してくれると期待しているのです。他にも中央図書館は面白いところがいっぱいありますから、その魅力を知っておいて欲しいなと思うんですよ。

木谷 今、書庫にはどれくらいの蔵書がありますか。

佐々木 中央図書館の書庫は100万冊くらい入っているのと違いますか。

浮塚 保存書庫に行っている30万冊を除くと100万冊位です。

木谷 本学が所蔵している図書が今200万冊くらいありますので、半分くらいですか。

井田 私は、学生を図書館に向かわせる工夫というのは自分なりにやってみるつもりなんです。実は3点やっております、1つは、最初4月に、二部政経のガイダンスで、担任教員がクラスの学生に対して概括的なことを話す場があるんです。そのときに私はこういうふうにはしゃべっているんです。それは、皆さんが納める授業料というのは決して安いものではないでしょう。しかし、この授業料は授業を受けに来るための費用だけではないんですよ。図書館を利用したり、こういう施設利用料も全部入っている。図書館の本代、こういうものも入っているんだと。だから、それだけ授業料を払っている以上は、それを活用しなければ損なんですよと話しています。

2番目は、これに関してはこの人の文献があって翻訳もされていて、明治の図書館にも入っていますから見てください、興味があったら読んでくださいということを、可能なかぎり授業で言うようにしているんです。

3番目ですが、政経学部には3年のゼミにはゼミ外書というのがありまして、外国書講読があるんですね。もともと外国書講読というのは学部で通常あるんですけども、これですと40人、50人で1年に1回か2回回るだけで、ものにならんというので、外書をゼミでやっているそうなんですけれども、これが私が来て6年になるんですけど、なかなかうまくいかないんですね。つまり、専門的なものの外書を読ませても、どうしても素養のない3年生には、ついてこれないというか興味も持てないし知識がないわけですよ。かといって、あまりやさしいことをやりましても、こっちが面白くないんですね。何だかんだ言っても回しますと、12人のゼミだとしましても半期に1度しか回ってこなかったりして、結局何のためにあるんだろうという感じがしたんですね。

今年からちょっと方針を変えまして、こうしたんです。まず図書館に連れて行きまして、図書館の地下1階に新聞コーナーがありますね。あそこにワシントンポストやニューヨークタイムスなど各国の主要新聞が入っています。これを見せるわけです。外書はテキストを用意しない。用意しないが、この新聞のエディトリアル(社説)というのは、この新聞だったら何面ぐらいにあるからというのを教えて、各自が社説をコピーして、それを訳して発表するようにということにしたんです。

そうしますとけっこう食いついてきてね。外国の新聞を読んでいるというのは、何となく知的な作業をしているような気になるらしいんですね。しかも社説で時事問題がありますね。イラク情勢とかああいうのは、何だかんだ言いましても学生はけっこう関心を持っていますので、それでやりますとわりにみんな英字新聞を、ニューヨークタイムスだとか何とかやってきますね。そういうふうにして、まず行かせるようにするという事です。一応この3点でやっております。

木谷 井田先生どうもありがとうございます。それでは海野先生はいかがですか。

海野 先ほど佐々木先生からお話が出ましたように、アメリカに留学していた時は、本当にレポートが多くて、図書館に行かざるを得なかったですね。行かないとできないですから。アメリカはテキスト代が日本と比べて高いですし(笑)。

佐々木 そう、アメリカでは一般の消費者物価に比して本が異常と思えるほど高いんです。

海野 演習 A と B を担当させていただいております。演習 A では図書館の館内ツアーを利用しています。とにかく1年生のときから図書館を活用するように促しています。

演習 B は、演習 A もやっていますが、チームプロジェクトが多いんです。中央図書館の地下にグループで勉強ができる部屋がありますよね。ホワイトボードがあって、あそこをうちのゼミ生たちはよく使っています。ですから、携帯に電話をかけても通じません。でも遊んでるわけじゃないんです。チームプロジェクトのためにあの子たちは図書館の部屋を活用しています。4チームありますから、全ての部屋を使って図書館でプロジェクトに取り組んでいます。

本を紹介するときも、今の学生は、メリットがあるとか実践的なものが好きなので、これはすごい実践的だと言っていますけど。

木谷 浮塚さん、最前線の総合サービス課で仕事をされていまして、もう少し学生が図書館に足を運んでくれる方策とか、あるいは本を読んでもらえるような環境づくりという側面で、お考えになっていることをお聞かせ

ください。

浮塚 図書館にはものすごい数の学生が来ています。例えば 2002 年度でいうと 100 万人近くの利用者が来ています。リバティタワーに図書館ができましたので、前の図書館と比べて足回りが良いし、開館日や開館時間が延びたので入館者は 4~5 割増えています。

先ほど海野先生が言われたように、グループ閲覧室はゼミなどに利用され、自由にディスカッションできる環境にあります。共同閲覧室はグループ単位でなくても利用できるので、どちらも利用者が多いです。それからマルチメディアエリアは待ち行列ができるくらい混雑しています。

また、学生を図書館へ呼び込むために、新入生向けのガイダンスやゼミツアー、データベース講習会などを行なっています。

施設が新しくなり利用者は非常に多いのですが、それが図書の貸出冊数の増加には結びつかない。そのことが課題であると思います。

例えば蔵書を構成する選書の問題、選書は、明治大学の図書館は 120 年の歴史がありますので、その積み重ねです。漫画は入れないとか、そういうものがありますが、利用者が多いのに、なぜ学生一人あたりの貸出冊数の増加に結びつかないのか、選書のありかたも含めて考えなければならない問題だと思います。

木谷 浮塚さんありがとうございました。いまマルチメディアの話が出ましたけれども、梅田さんはいかがですか。

梅田 大勢の学生たちがパソコンを利用に来ています。図書館に入って左側にマルチメディアエリアがありますが、入ったらすぐ左のマルチへ来て、終わったらそのまま帰っていくという学生も多いです。

こちらとしては、コンピュータ、インターネットの情報だけが全てではなく、紙媒体などにしか見つけられない情報もあるんですよ、ブラウジングも大切なんですよということをアナウンス等はしてはいるんですけども。

木谷 行列ができるほど、長時間の待ち時間になったりすることがあるんですか。

浮塚 そうですね。マルチメディアのパソコンを使える時間というのは時間制限してませんから、あそこは外部から見学に見えた方も驚くんですね。図書館の中で行列ができる風景なんて初めて見たというぐらい(笑)。

木谷 パソコンを1人で独占して朝からやっている人も中にはいるのでしょうか。

梅田 いるかもしれないですね。

木谷 そうですか。伝統的な紙媒体中心の図書館と、インターネットを利用して世界の情報にアクセスしたり、デジタルコンテンツを閲覧したりと、これからのIT社会に欠かせない電子図書館と、図書館も蔵書の充実と電子メディアの充実という両方に対応していかなければならないということで大変苦慮しているところがあるわけですが。

浮塚 もう1つ話をさせていただきますと、うちの図書館は貴重書庫を除いて全部オープンスペースにしています。書庫に入って行って自由に本を手にとることができる、探すことができる。これは非常に評判がいいですね。佐々木先生に言わせると、全部オープンにすることの弊害もあるんだという話を以前お聞きしましたが、今のところそういうふうに広がっています。

木谷 全部オープンにするということについて佐々木先生いかがですか。

佐々木 いや、今のところ問題は起きてないようですので、むしろプラス面のほうに動いているのでいいんじゃないかと思います。

木谷 それぞれ教員および図書館員の立場から、ご努力をされている様子がうかがえました。

魅力ある優れた大学図書館とは

木谷 それでは次に、どのような図書館が優れた図書館と言えるのかということでお話をお伺いしたいと思います。

一般的に、図書館の構成要素として「資料」「建物」「図書館員」「利用者」があげられます。図書館の基本的機能として、良き選書、そして収集、

保存と迅速で効率的なサービス、さらに指導が必要であると言われていきます。例えば研究者から見た図書館、また職員、図書館員から見た図書館、いろいろ立場があると思います。研究者から見た図書館の場合、図書館に何を求めているのか。お話をお聞かせいただきたいと思います。

井田 私が今までいろいろな図書館を利用して感じたことですが、1つは開架の度合いですね。開架による弊害、例えば資料の紛失であるとか、特に佐々木先生のような考古学専攻の方は、貴重資料が多いのでそういう問題はあると思うんですが、開架の度合いが多いことによって、関連分野のいろいろな本を手にすることができますので、これが非常に大きな要素だと考えています。

もう1つは、グループ学習ができるような場所がたくさんあることです。黙って1人で本を読むというのは、最近の学生はどちらかというと苦手としているところでして、何かグループで調べものをして、資料を集めてワイワイやるというのが比較的得意なような気がします。そこで私のゼミでも頻繁にグループ閲覧室を利用させていただいております。グループ閲覧室で、本を持ってきていろいろ積み上げて、ああだこうだとやる。そういう場所があるということ。この2つが特に私が今まで体験的にいい図書館だなと思った要因です。

海野 一言で言わせていただければ、ライブラリアンに感謝しております。明治大学に来てからもそうですし、アメリカのときもそうでした。ライブラリアンからサポートをいただきまして。以前、梅田さんからサポートをいただきましたね(笑)。

それと、いま井田先生のお話にありましたように、やはりチームプロジェクトをやるようなスペースを多くとっていただきたいです。特に、ホワイトボードがあると、学習効果を上げますから。

佐々木 先ほど木谷先生がおっしゃったように、図書館にはいろいろな見方があるというのは事実で、学生の期待にこたえるということは大切であることは十分認識しております。と同時に、先ほど浮塚さんのお話にありましたが、例えばうちは漫画を入れないという1つのポリシーに象徴されますように、研究図書館としての側面が大きいですから、学部学生があまり利用しないような学術書でも、きっちり入れておく必要性はあると思う

んです。特に英語圏の学術書は、だいたい300部から500部刷ってすぐ絶版ですから。次世代の研究者のためにいい本を残す役割というのにも必要だなと、僕は思っております。井田先生、海野先生のご意見は、僕も正しいともちろん思っております。

木谷 浮塚さん、図書館員から見た図書館サービスというのは非常に幅広いと思うんですけども、基本的にはこういうサービスが図書館利用者にはいいだろうというような、そういった面で実際にやっておられることを教えていただきたいのですが。

浮塚 先ほど話が出ましたが、中央図書館は施設としては新しくなった。それで非常に使いやすい図書館ができました。これは図書館サービスのなかで重要な部分です。

もう1つは、いま佐々木先生が言われたように資料ですよ。資料というのは、今の利用者だけを対象とするのではなくて、大学図書館ですから、後世にも残していく資料も集めなければいけない。良い資料を集めるというのも、図書館サービスの大きなウエートを占めていると思います。

もう1つは、利用者がいますから、利用者と資料を結びつけるのが図書館職員ですから、サービスをいい形で提供するためには、職員が普段から研修なりトレーニングによって、いろいろなサービスを提供できるような能力を高めていく必要があるかなというふうに思ってます。

木谷 梅田さん、いかがですか。

梅田 図書館員としては、先生方のような利用者の方とのよい信頼関係を築いて、信用してもらえるサービスができればと思います。

学生に対しては、お客様だけではなく、サービスをする中で、図書館の利用法、資料やデータベースの利用方法など、教育的なこともできるのが、よい大学図書館なのではないかなと。ただし今はまだ自分は、利用者に育てられているようですが、将来は利用者を育てられるような図書館員になれたらなと思います。

木谷 確かに利用者が図書館職員を育てる場合もあります。結局は人と人との信頼関係ですね。

梅田 どんなにいろんな情報が IT 化されたとしても、やはりフェイスツーフェイスなやり取りといいたいでしょうか、図書館の既存の業務は大切にしていけないと。

浮塚 利用者サービスというか、学生さんなり先生方がカウンターに来られたときに、図書館サイドの対応の悪さということがあれば、その図書館に対するイメージ、印象が非常に悪くなりますから、そこは気をつけないといけないなと思います。中央図書館には投書箱があり、そこにいろいろな意見が出される。その苦情の中で職員に対するマナーの問題というものもありますので、そういうことについては気をつけなければいけないということで、こちらでは注意するようにしておりますけれども。

木谷 学生のマナーの悪さみたいなものはありませんか(笑)。

浮塚 学生のマナーの悪さというのは閉口するぐらいですね。閲覧席でおしゃべりはするし、携帯は使う。図書館のほうでも 30 分に 1 回ぐらい職員が全部巡回して回っています。そうするとペットボトルなんかも持ち込んで机に置いているんですが、注意していますので、クレームは減りました。

梅田 ドリンクコーナーがあって、そこで飲むようにと指導しています。

木谷 それ以外に何かありますでしょうか。

梅田 こちらが注意をしても素直に聞いてくれないこともあります。職員の注意のしかたが悪いというような投書もありますので、注意するのも気を遣ってはいますが。でも、マナーの悪い学生ばかりではなくて、きちんとやってくれる学生のほうが多いですから、その人たちのために、注意をして回っています。

木谷 そうしますと、多いのは私語ですか。

浮塚 そうですね。私語に関する投書は多いですね。

木谷 授業の延長ですね(笑)。

佐々木 アメリカの大学に比べて、日本人は自習室でよくしゃべりますね。僕、関西の大学で非常勤講師をしてましたけど、明治に限らないですよ。なんででしょうね。

井田 おそらく公共性というものに対して日本人の感覚が低いんじゃないですかね。例えばビーチに行きますと、平気で物を捨てて帰ってきますよね。アメリカなんかああいうことはないですよ。公共のところとプライベートというのがあまりはっきりしてないものですから、図書館という公共の場でもプライベートなおしゃべりとか、そこがどうもしっかりしてないような気もするんですよ。どこかで教育しなければだめなのかもしれない。しつけと言うんですかね。

木谷 教員の立場から見て、こういう図書館員がいるといいねといったような図書館員に対する理想像のようなものをお持ちでしたらお聞かせください。

佐々木 うちの図書館の事務スタッフは優れた人ばかりだから(笑)、むしろ僕の要望というのは、我々教員のほうがもう少ししっかりしないといけないんじゃないかと、常々思っています。先ほど浮塚さんが、資料と人をつなぐ何かとおっしゃったけど、これは我々教員が教室でもっとできることだと思うんですよ。学生を本と図書館に向かわせるために私が先ほど3つの方法をあげましたが、そういう工夫を実践している先生方はあまり多いようには思えません。

もうひとつ、専任教員の図書館への姿勢に関して私がびっくりしてしまった事例を紹介しましょう。アフリカ、タンザニアに、150 万年前に遡る、人類初期の祖先が残した Olduvai Gorge という世界的に有名な旧石器時代遺跡の調査報告書が全 5 巻出版されております。1965, 1967, 1971 年に 1, 2, 3 巻と出て、20 年経って 1991 年に 4 巻、1994 年に最後の 5 巻がやっと出たのです。私が 1999 年 4 月に採用されたときには、1, 2, 3 巻しか所蔵されておらず、2000 年 4 月に考古学専攻の図書発注担当になったときには、4 巻は既に絶版で、5 巻のみ急いで発注しました。その後ハーバード大学の近所の古本屋で 4 巻を運良く見つけて購入して図書館に入れましたから、明治で 5 巻すべて揃えることができました。それまで重要な洋書をきっちり発注してこられた杉原荘介先生が 1983 年に在職中に急逝されて以後、中国語、韓国語の遺跡調査報告書の発注に力点を移したということは、先輩の先生から聞きました。でも、1, 2, 3 巻と発注して、なぜ同じシリーズの 4, 5 巻を発注しなかったのか。これはやはり、発注する教

員側の責任だと思うのです。実際、1980年代、1990年代前半のヨーロッパ言語の考古学学術書は基本的文献も抜けが多くて、またそれらがほとんど現在絶版になっていて、困っています。

木谷 失われた20年ですかね(笑)。

佐々木 そこまでいきなりですけども(笑)。

海野 図書館への要望ということで、ちょっと理想的かもしれませんが。コストの問題もありますが、24時間オープンしていただきたいです。3時とか4時まで図書館で学生たちがチームプロジェクトやレポートに取り組んでいる姿を見たいですね。必ず、学生のレベルアップになります。そのぐらいやらないとグローバルな競争に勝てるような人材が明治大学から育ちません。彼ら(デンマーク人、イタリア人、インド人の友人)は凄かったですからね。先日、学生が来て私にこう言うのです。「アルバイトが終わってから図書館でレポートをやろうと思ってもできません」。同じアルバイトをしている他大学の学生は、それができそうです。明治にはこんなにモチベーションの高い学生がいるのにニーズに応えていないなと思いました。

木谷 そういう場合、教員も一緒ですか？

海野 いやあ、教員は…(笑)。

木谷 教員は寝てるかもしれない。

海野 私、見に来ます。明治の学生が御茶ノ水に3時、4時まで残って頑張っている姿を見たいですから。本当に。

井田 ちょっと細かい話になるんですけど、私のゼミナールというのは金曜日に開講しているんです。サブゼミもその日にやっております、サブゼミはよくグループ閲覧室を使って、ゼミもグループ閲覧室をしばしば使うんですが、金曜日に棚卸ですか、月末に休館日がありますよね。あれが必ず金曜日なんですね。それで予定が何度も狂っている。金曜日がたまたま当たっているのならいいんですけども、もうちょっとほかのルールで休館日をつくってもらえないかと思うんですね。最後の日とかですね。それは木曜日だったり火曜日だったり月によって変わるとか。必ず金曜日で

すね。ですから私のゼミのときになっちゃう。たまたま金曜日なのか、それが何回もあるんですね。これをもっとほかのルールで休館日を移動していただけないかというのが、正直言っている不満です。それが1つです。

それから杞憂かもしれませんが、来年から法科大学院ができますよね。私、大学の人に図書館へ行きますと、試験期じゃないときは、朝9時から司法試験受験生がボーンと席をとりまして、法律書があって、閲覧室はほとんど司法試験受験生で占められるという状況が生まれたんですね。来年から法科大学院で200人ずつ入ってまいりますね。そうすると400人の学生ですよ。400人の学生が司法試験を目指して来ると、今のスペースで大丈夫だろうかという心配があります。

浮塚 法科大学院については、自習室として共同研究室が用意されています。開館時間がまだ決まってないですけども、朝の始発から終電までみたいな言い方をしていますので、長い時間開けるということになります。それから専用図書室は、研究棟の地下1階につくる。50席ぐらいしか入れないんですが、主に司法試験の受験参考書を用意する。図書館は法律関係といえば学術書や概説書中心、法科大学院の図書室は司法試験を中心とした参考書、それから長時間勉強するのであれば共同研究室というように資料と利用の使い分けをうまくやってもらえるんじゃないかなという希望的な観測を持っていますけれども。

井田 なるほど。あと問題なのは、どうも今の法科大学院の志願状況を見ると、いわゆる法科大学院浪人というのが相当出そうな気がするんですよね。4年生で法科大学院を落っこちて、もう一度チャレンジしようと。そこで図書館を利用する学生も出てくると思うんです。その人たちは法科大学院の施設は基本的に使えないと思いますから、そうした学生さんたちが来る場合、今の閲覧室だとオープンスペースになっていまして、前の人と対面になってやるんですけども、もう少し前が遮断された昔型の、そして電気がつくような、ああいうものも増やしたほうがいいんじゃないかなという気はするんですけどね。長期的に勉強をじっくりやりたい場合は、そういうほうが気が散らないというのがありますので。資料を調べるには、今のやり方が非常に適切だと思うんですけど、そのあたりは大丈夫なのかなと、ちょっと不安感もあるんです。

佐々木 法科大学院用の部屋をつくれればいいんです(笑)。スペースはあるんですよ。

浮塚 それが共同研究室です。そちらのほうに行ってもらうしかないなと思うんです。

木谷 ロースクールはこれからそういう意味では受験の目玉になるのかもしれないですね。

図書館利用教育の充実に向けて

木谷 それから来年、佐々木先生にも新しいスタッフとしてお願いしているんですけども、図書館を利用することの面白さ、楽しさを感じてもらうために現在、「図書館活用法」という講座を開講してまして、井田先生、海野先生、浮塚さん、梅田さんには大変お世話になっているんですけども。担当されていて、もっと活用法を充実したものにしていくという点でご意見やお考えを教えていただきたいのですが。

井田 私は「データベースの利用法」というテーマでさせていただいてまして、例えば、日経テレコンであるとか、MAGAZINEPLUS であるとか、そういうものの検索を中心に教えるんですけども、一番の問題は接続可能数が7 なんです。実習をするのですが、同時にできないんですよね。学生は100 人以上いますから、7 ずつやっていると、とんでもない事になります。日経テレコンは今までやってつながったためしがないですね。就職活動に使っているということもあるので。

どうでしょうか、日経テレコンの接続数はもっと増やしていただけないでしょうかね。一度もだれもつながらないという状況が出てしまうんです(笑)。

木谷 授業にならないのでしょうか。

井田 授業にならないです。日経テレコンは就職活動に使うので、接続数がほとんど埋まっちゃうんですね。MAGAZINEPLUS など大丈夫なんですけれども。これは前に見せまして、あとちょっとやってみてくださいみたいな話になるんですけども。まあ、予算の関係ありますけれども、

できるだけ接続数を増やしていただきたいということがあります。

木谷 生田で2クラスの授業はいかがでしたか。

井田 結局、下のクラスは一切見れませんでしたので、下のクラスは画像のところだけがビデオですかで写されて、それで下に流れていたようですが、下のクラスというか、もう1つの教室は結局まったくわからないですね。

木谷 生田は1クラスで80名までしか入れないんです。そんな関係で、結局ダブルクラスになって、Aというクラスには先生がいるんですけども、Bというクラスには、TA(Teaching Assistant)の方でしたか。

井田 私のところはTAが1人ついてやっていまして、TAの方は一番後ろでコンピュータ、画像が見えるところで見てもらいました。

木谷 来年はダブルキャストといいましょうか、各クラスに1人ずつの担当者で対応しようかという話が出ているんですけど、やはり先生がいらないというのはいかがなものか。

井田 そうですね。それで、その画面というのが私は写らないらしいですね(笑)。要するにスクリーンしか写らないらしいんですよ。それで声だけしか聞こえない。だから教員の顔がわからずに終わってしまうそういうシステムらしいんですね。

浮塚 私は駿河台を担当しました。昨年も経験しましたが、学生が多く、補助椅子で受講する人もいたので、もう少し大きい教室にするか、人数を絞り込むか、どちらかにしたほうがいいかなと思いました。それから、この講座があることによって、学生さんが図書館を使いたくなったとか、実際書庫に入ってみてよかったという話をずいぶん聞きますので、そういう意味では図書館をいかに上手に使うか、学生生活を有意義にするかということが、この講座を通して広まってきたんじゃないかというような気がしますね。

木谷 そういうプロモーションになっているわけですね。現在、各キャンパス200名あまりの方々が受講していますから、合計で700名ぐらいになるんですね。駿河台、生田、和泉の3キャンパスで。おかげさまで大変多

くの学生が履修されてます。

梅田さんはいかがでしょう。

梅田 今年初めて生田を担当して、例の2つの教室を体験しましたが、やはり下の教室の学生がかわいそうかなと感じました。

総合講座は実習を目玉にしているので、実習ができるように人数を絞ったり、前期・後期の年2回開講もいいかと思います。

また、この講座を担当して授業の準備のために勉強をとてよくしたし、自分にとってもすごいプラスになる体験でした。このような経験は図書館員の資質の向上につながるのではないかと思います。

木谷 そういいところが裏側にあるわけですが、実際にいま自分で図書館業務を担当されていて、その振り返りというのでしょうか、学生との授業でのやりとりの中でフィードバックできると、また自分の今所有している業務遂行能力をレベルアップさせていくというチャンスでもあります。ただ時間的に負担は増えますので仕事とのやりくりみたいのがスムーズにいけばよろしいのですが、図書館員の担当者のほうから、こういう講座を担当してプラスになっているということを聞きますと、大変ありがたいことだと思っております。これからもよろしくご協力をお願いしたいと思います。

教員と図書館員から見た図書館への要望

木谷 最後に、図書館への要望ということで、図書館の運営いろいろありますけれども、先生方並びに図書館員の方々から、これから明治の図書館が魅力あふれる大学図書館として発展していくための何かお考えがありましたら、お話をいただければと思います。

これから図書館に対してこういうことをやってほしいですとか、もっとこんなことをしたらいいんじゃないのということがありましたら。

海野 やはりゲストスピーカーとか。もうやっていらっしゃるかもしれませんが。

浮塚 図書館主催の講演会は行なっています。

海野 何かそういうイベントとか。

井田 図書館に向かわせるにはということで、今日も話をしたわけですが、それをどの程度やればいいのかという問題が、正直いってあります。先ほど学生のマナーの問題もありましたけれども、あまり行け行けと言って、マナーの悪い学生が行かれても困るということがありますので、どこまでそれを我々が強調すべきなのかなって、いつも考えてしまいますね。今来ている学生だから、まだあの程度ですんでいるのじゃないかという気もします。

あと資料について、ほかの大学の学生から聞いたところ、明治大学の図書館のいいところは、資料によっては複数というか2冊、3冊本がある場合があるというんです。例えば立教などは、どれも1冊しかないらしいんです。試験期やレポートのときになりますと借りますよね。そうするとなくなっちゃうんですって。だけど明治の場合は数冊ある場合もあるので、それがありがたいという話を聞きましたね。シラバス本であるとか幾つかの本というのは複数ある場合もありますから、それがいいところだということですから。

浮塚 今は、副本購入はなるべく避けるようにしています。

井田 予算がありますからね。

木谷 あとスペースの問題もありますから。

井田 そうですね。大学ランキングを見ますと、スペースなども1つの基準に入っていますよね。学生1人当たりのスペースというの。そうすると、この場所にあるのは条件的に不利ですよ。

佐々木 うちの図書館は大学の限られた枠の中でみんなすごく頑張っているから、それはそれでいいと思うんですけど、将来的にはどうなんでしょう。図書館の役割は、これからもっと大きくなっていくと思うのです。最近びっくりしたのは、授業で「エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』」くらいは、自分の専攻が何であれ、買って読んでおこう」と言ったら、次の週に学生が、「岩波文庫版は品切れです」と言うのです。恐らく、私が高校、大学生であった1970年代、80年代前半ほど文庫も売れなくなったので、出版社も普段は品切れ状態にしておくのだと思います。そういう

ご時世だからこそ、シラバス本に限らず、この種の基本的文献は、多くの学生が使えるよう、複数冊おいておくべきだと思うのです。この場合、1冊は禁帯出にすべきですね。というのは、関西で非常勤講師をしているときに、課題論文を出したら、クラスメートが使えないように考えてでしょうか、一人の学生が必読論文を収録している本を独占してしまった、苦い思い出があるのです。

それで問題になってくるのは図書館のスペースですね。これについては、私には夢があるのです。現在の10号館と14号館をつぶして、あそこに地下3階、地上5階程度の「第2中央図書館」を建てるのです。もちろん、地上6階以上は別の目的の施設を作ればよい。本は毎年7万冊のペースで増えていきますし、先ほどのロースクールの問題もあって、自習室は多いに越したことはありません。しばらくは郊外の収蔵庫に本を置いておくのは致し方ないとはいえ、やはり本の背表紙を見て本を選べるのが理想です。また、総学生数3万4千といえ、1981年に図書館の蔵書量が600万冊を突破したミシガン大学の学生数に近いですから、うちの蔵書量も600万冊くらいあって、しかるべきだと常々思っています。ですから、22世紀に向けた図書館のヴィジョンとして、多少無理をしてでも、第2中央図書館計画があってもいいんじゃないかなとは思っていますよ。

井田 アメリカは、指定図書は20冊とか、そういうふうにあるわけですよね。

佐々木 あります。

井田 ですからそれが可能ですけれども、日本の大学図書館の場合は、あってもせいぜい数冊ですね。ですからゼミでも回りませんよね。そのシステムを変えるのはなかなか難しいですね。

木谷 シラバス本でも数冊です。

浮塚 指定図書は3冊用意しているはずですが、利用されている先生がそう多くないですね。

佐々木 アメリカの場合は、課題図書を例えば20冊購入するでしょ。1冊は永久に保存しておくんですけど、多くのの副本が不要になったら古本屋に売却処分しているんですよ。日本では考えられないくらい柔軟なこ

とをやっています。そういうことはなかなか難しいとは思いますが、せめてシラバス本は5冊ぐらいあると、だいぶ違いますよ。その対応は、じゃ浮塚さんに(笑)。

木谷 最後に一言、これだけは言っておきたいというものを、お聞かせください。

梅田 図書館としては、やはり先生方からいろいろ言われているうちが花といいですか(笑)、これからもコミットしていただき、いろいろご意見をいただきたいと思います。

佐々木 我々も言いますが、図書館の事務スタッフからもいろいろ教えていただいたほうが、私も具体的な提言をしやすいので、よろしくお願いします。

海野 今後ともライブラリアンの皆さん、よろしくお願い致します(笑)。

井田 入学したばかりの学生とか、図書館にほとんど足を運んでない学生にしてみますと、例えば、中央図書館の1階に3人ぐらいの方が控えていますよね。あの方たちが何をしてくださるのか、おそらくわからなくて声がかかけられないという学生がかなりいると思うんですね。ですから何かの形で、こういうサービスをする人たちですよということを知らせられないものなのか。こういうことを聞きたければ、あそこの人に聞きに行ってくださいというのを何か伝えられないだろうかという気はします。

浮塚 図書館を育てていくのは、利用者であり、学生である利用者ですから、これから良き図書館を育てていくためには、先生方の熱いご支援をいただければ、そしてまた厳しい意見を出していただければ、それが図書館に反映すると思います。先ほど先生が言われたように24時間図書館開館とか、駿河台に大きな建物が建てられればいいという話は、そういうふうになれば私もうれしいと思います。

もう1つ、和泉の図書館が中央図書館に比べてあまりにも施設が悪い。和泉に新しい図書館ができて、中央図書館と同じようなサービスが提供できる環境が整えばいいなというのがありますので、ぜひ先生方にいい知恵を出していただいて、新しい図書館をつくっていければと思います。

木谷 和泉の新図書館は今度の新しい教育棟施設の中には残念ながら入らなかったですね。次回ですかね。そこにはイの一番に、ぜひその中に入れていただかなくてはいけないと思います。

本日は長時間どうもありがとうございました。これから本学の図書館運営をしていく中で貴重なご意見が多かったと思いますので、こういったお考えを、これからの図書館運営の中で実りあるものとして反映させながら実現させていきたいと思っています。

——了——